二〇一二年度大学入試センター試験　解説〈現代文〉

第1問　評論　木村敏「境界としての自己」

［概　要］

個体および集団における自他の境界と自己意識についての考察文。昨年よりもやや文章量が少なくなっている。頻出テーマである自己存在・自他の意識に関するもので、論理展開が明快な文章といえる。やや抽象的な文章ではあるが、**問6**の「論の展開」に関しての設問が全体を読み解くヒントになっている点も注目したい。

設問別では、**問1**の漢字が昨年に引き続きやや難しいが、**問2**～**問5**までは基本～標準レベルの傍線問題。特徴としては、「指示語」に絡む問題が複数出されたことが目を引く。**問6**はここ二年、(i)・(ii)に分かれていたが、今年は論の展開を問うもののみであり、これによってマーク数も一つに減った。この形は二〇〇七年以来のものである。**問5**と**問6**の選択肢は3行ずつと長いが、難易度的には決して高くないので慎重に検討して正解したい。

［解　説］

問1　漢字問題。

傍線部(ア)～(オ)の漢字と同じ漢字を含むものをそれぞれ選べ。

昨年に続いて受験生の漢字力の有無が問われるレベルの漢字が並んだ。「駆逐」や「折衝」など、自力では書きづらい漢字がいくつかあるはずで、その場合、文脈を踏まえた判断と、選択肢を「消去法」で落として正解にたどりつくという解法技術が必要になる。いずれにせよ、日頃から漢字に関して多角的な勉強を積み重ねておくことが望ましい。

(ア)　駆逐　①蓄積　②牧畜　◎③逐次　④竹馬　⑤構築

(イ)　摂取　①拙劣　◎②摂理　③雪辱　④応接　⑤屈折

(ウ)　習慣　①歓喜　②監視　③看護　④循環　◎⑤慣例

(エ) 折衝　①承諾　②詳細　◎③衝突　④交渉　⑤省力

(オ) 尽くせない　①迅速　②敵陣　③甚大　④尋常　◎⑤尽力

正解　(ア) 1　(イ) 2　(ウ) 3　(エ) 4　(オ) 5　（各2点）

問2　応用

傍線部A「ある個体と関係をもつ他の個体たちもやはり当の個体の環境を構成する要件となる」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを選べ。

まず、傍線部の直前に「その場合」という指示語があることを見落とさないこと。「その」が指し示す内容を本文に求めると、「各個体はそれぞれ固有の環境との接点で～自己自身の生存を求めて行動する」という直前の一文を指し示していることがわかる。

各個体はそれぞれ固有の環境との接点で～自己自身の生存を求めて行動する。

≒

その場合、

A ある個体と関係をもつ他の個体たちもやはり当の個体の環境を構成する要件となることはいうまでもないし、……

この内容は、要するに各個体が生存するためには、食行動という生命維持のもっとも基本的な営為だけでなく、協力するにしろ競合するにしろ他の個体との関係が、生存していくうえで避けて通れない条件であることを述べている。

選択肢を見ると、「他の個体との関係」の説明として、①は、「配偶者をめぐって競い合う」が前述の指示語で指し示された箇所に書かれていないので×、③は、「他の個体」についてまったく触れられていないので×、⑤は、「他の個体と暮らすための空間」と「空間」に絞っている点が×となり、②と④に絞られる。

②の、「食物をめぐる争いの相手に加え、協調して生活をしていく異種の個体」はかなり迷う内容だが、「その場合」で指し示されている箇所の内容をよく読むと、各個体の固有の環境の「接点」における他の個体との協力・競合関係について述べられているのであって、「食物をめぐる争いの相手」や「協調して生活をしていく異種の個体」というほど他の個体との深い関係について述べているわけではない。つまり、ここでのポイントは環境の「境

界面」についての話であって他の個体との「争い」や「協調して生活をしていく」という関係についての話ではないので×。また、「協調（協力）」関係だけでなく、「競合関係」についても書かれていなければ説明不足である点も付け加えておく。

残った④は、「食行動などの場面で交わる他の個体」とやや大雑把な表現ではあるが、「その場合」で指し示されている箇所の内容をつかんでおり、また前半部分の「気象のような自然現象に加え」の部分は、第一段落の内容を踏まえており、これが正解。

●傍線部中、あるいは傍線部の直前に指示語がある場合、まずは指示語問題として解く。

これはセンター現代文で最頻出であるにとどまらず、どの大学の現代文においても重要な解法の鉄則であり、特に二〇一二年の評論を解くうえでもっとも大切なパターンといえる。

ここでは傍線部の直前にある「その場合」という指示語に着目すれば、④の「食行動などの場面で交わる他の個体」という表現以外に指示語の指し示す内容を受けている選択肢はないことがわかる。

傍線部までの二つの段落の流れと、傍線部直前の指示語に着目して解く、というセンター評論の典型的な問題といえる。

正解　6　④　（8点）

問3　基本

傍線部B「思いもかけぬ複雑な構造をもっている」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを選べ。

傍線部説明問題の解法の基本は、傍線部の内容をわかりやすく言い換えてある箇所を探して解答の根拠とすることにあるが、この問題においても**問2**同様、「指示語」が大きなポイントになる。

傍線部の直後に「右に見たとおり」と書かれていることに着目できれば、傍線部の具体的説明は、傍線部より前に書かれていることがわかる。

ことはけっして簡単でない～（以下段落最後までの内容）

≒

B 思いもかけぬ複雑な構造をもっていることは右に見たとおりなのだが、

傍線部の「思いもかけぬ複雑な構造」というのは、直前の段落の「ことはけっして簡単でない」以下、段落最後まで書かれている内容だとわかる。その内容を説明してある選択肢はズバリ⑤だ。集団内部の各個体が独自な生命維持行動を営みながらも、同時に集団全体の統一的な行動も保たれるという本文の内容をきちんと押さえている。ただし、他の選択肢も必ず消去法で×して確認しておこう。

①は、「集団からの自立」はまだいいとしても、後半の「内部環境は緊張関係を常にはらんでいる」というのは間違い。「常に」などの全肯定・全否定的な語句に関しては、文中に確実に書かれていない限り、まず×の候補となることは覚えておこう。

②の、「生命維持の～利害関係が表面化しやすい。そのため、～内実が常に変容している」という因果関係は、本文には書かれていない。①同様「常に」も×。

③は、後半の「集団として常に最適な結果を生み出す調整がはかられる」はいかにも書かれていそうな内容だが、本文の該当箇所を読むと、個体が独自の生命維持活動を営みながら、「全体としては集団の統一的な行動が保たれている」と書かれているだけであって、「集団として常に最適な結果を生み出す調整」がはかられているわけではないので×。ここでも「常に」という記述が本文には見つからない。

④は、「統制の破壊行動を起こす個体が内部に生じることもありうる」が、「その可能性は封じ込められている」という内容だが、「右に見たとおり」に該当する本文の箇所にはそうした個体の出現やその可能性の封じ込めについて書かれていないので×。傍線部の後に出でくる「人間」の場合は、「統制の破壊行動を起こす個体が内部に生じうることもありうる」が、傍線部の段階はまだ一般的な「生物」の個体と集団についての考察の段階であることを読み落とさないようにしてほしい。

正解　7　⑤　（8点）

問4　標準

傍線部C「生物としての人間の、最大の悲劇」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを選べ。

この問題も**問2**、**問3**と同じで、「指示語」に着目することが大切。

●傍線部中、あるいは傍線部の直前に指示語がある場合、まずは指示語問題として解く。

ここでは、傍線部の直前の「ここに」とあるのを見落とさないことが大切になる。

元来は生存に有利であるはずの自己意識が、同じく生存を目的としているはずの集団行動と、ときには真っ向から対立することになる。

≒

ここに

C 生物としての人間の、最大の悲劇が潜んでいるのだろう。

傍線部の直前の指示語が指し示す内容としては、要するに「自己意識と集団行動との真っ向からの対立」であり、傍線部の「生物としての人間の、最大の悲劇」とは、「生存」という同じ目的をもつ自己意識と集団とが矛盾し、双方にとっての危機に陥る可能性のことを意味している。

その内容をきちんと説明しているのは①しかない。特に、個体の意識と集団の目的とが「真っ向から対立する」と本文で書かれていることを選択肢では「矛盾」と言い換えて説明してある点がポイント。

●矛盾＝二つのものが論理的に整合しないこと。⇔真っ向から対立すること。

ここでの二つのものとは、「個体の意識（自己意識）」と「集団の目的」であるが、その二つが真っ向から対立し、矛盾することから起こる悲劇とは、双方の崩壊の可能性であることは間違いない。本文には明記されていないが、選択肢①の後半部分に関してはこの説明になっている点も押さえておきたい。

②は、「強固な集団維持という目的を共有する」とあり、これでは個体の意識と集団の目的とが「真っ向から対立する」ことにはならないので×。

③は、「場合によっては」以下の説明が本文に書かれていない点と、個体の意識と集団の目的との矛盾について触れていない点で決定的に×。

④は、「場合によっては集団を防御する意識が過剰になり」以下がおかしい。集団間の利害関係については本文では触れられていない。

⑤は、「場合によっては環境に大きな変化をもたらし」とあるが、ここでは「環境」うんぬんの問題ではないので×。

正解　8　①　（8点）

問5　標準

傍線部D「しかしそのようなイメージは、特異点としての『私』という自己を考える場合には適切でない。」とあるが、筆者はどのような考えから適切でないと判断しているのか。その説明として最も適当なものを選べ。

三行に及ぶ選択肢なので、慎重に吟味していこう。

ここでもまずは傍線部中の「そのような」が指し示す「イメージ」の具体的内容を押さえることが大切だが、「筆者はどのような考えから適切でないと判断しているのか」という設問の意図を汲んで解答することも忘れないようにしたい。

まず「そのようなイメージ」とは筆者の言う「ふつうにいわれる『自他関係』」についてのイメージのことで、その内容は次のように書かれている。

境界線をはさんだ二つの領域が想定されていて、他者は外部世界に、自己は内部世界におかれること

≒

D そのようなイメージ

選択肢で「そのようなイメージ」の説明部分を見ると、指示語の指し示す内容になっているものは、③の「他者の属する外部世界との対立関係で自己をとらえる見方」と、④の「個体の外部に境界を設定して自己の絶対的な異質性を確立する『私』の世界のとらえ方」が該当する。

①の「人間の認知機能を他個体と自己とを識別するものととらえる見方」や、②の「世界の中での特異な自己の位置を定める精神分析的な『私』のとらえ方」については、「そのような」で指示される内容（「他者は外、自己は内」という関係）を含んでいない点で×になる。

また⑤に関しては、「すべての他者を外部世界に置き自己を内部世界に押し込めるような『私』のとらえ方」の「自己を内部世界に押し込める」という表現が間違っているので×。自己は内部世界におかれるのであって押し込められるわけではない。

二〇一二年の評論は、指示語の絡む問題が多いのが特徴であり、何度も繰り返し書いているように、「指示語の指し示す内容をきちんと押さえているかどうか」が選択肢の正誤を判定していく最初の基準になる。

残った二つの選択肢は、「筆者はどのような考えから適切でないと判断しているのか」についての説明部分で判断していく。

筆者の考えは傍線部直後の次の文以下で展開されている。

「私」が円の中心だとするならば、……。しかし中心には内部というものがない。（中略）……「私」は「内」でありながら「内」と「外」の境界それ自身でもあるという非合理な位置を占めている。「私」とは、実は「自我境界」そのもののことだといっていい。（中略）……人間の場合、「私」だけでなく「われわれ」もやはり他者との境界を生き、そしてそれを意識している。

この内容を端的にまとめて説明している選択肢は③。「絶対的な異質性をもつ『私』の自己意識は内部空間をもたない円の中心のようなものであり、むしろ他者との境界そのものにほかならないという考え」の部分は、先ほどあげた傍線部以下で書かれている筆者の考えをまとめたものといえるので、これが正解。

④は、「他者も同様な言語のはたらきによって内部世界をとらえているとすると」とあるが、こうした記述は本文にはない。

ちなみに⑤の後半は、「当の内部世界にある自己意識は～合理的に証明できない」とあるが、「合理的に証明できない」のではなく、「私」は「内」でありながら「内」と「外」の境界それ自身でもあるという非合理な位置を占めている、というのが正しい説明。「合理」「非合理」という言葉に惑わされないようにしてほしい。この選択肢を選んだ人は、正確な読解を心がけよう。

正解　9　③　（8点）

問6　標準

この文章の論の展開に関する説明として最も適当なものを選べ。

一昨年、昨年と**問6**は「文章の表現」を問う問題であり、(i)と(ii)の二つに分かれていたが、今年は「論の展開に関する説明問題」になった。

一昨年の(i)ではダッシュ記号「――」の「効果」が問われ、昨年は「『中身』？」と、筆者が問い直している箇所に波線が引かれ、その表現効果が問われたが、今年はこうした問題が姿を消した。来年以降、どちらの形式になるかは不明だが、受験生としてはどちらの設問にも対応できる実力をつけておいてほしい。

問6の解法としては、基本的に「消去法」で解くのが正しい。選択肢を要素に分け、その内容を本文と照らし合わせながら、正確に○×の判断をしていく。判断に迷う場合は△にして通過しておき、二度目に最終決断を下すよう、慎重に解いていこう。

①は、「個々の個体の場合と複数の個体の場合との異なりを明らかにしている」とあるが、筆者は「集団の場合でも、それがまとまった行動をとるのはやはり個体に準じて考えられる」と書いているので×。

②は、「まず…群全体や家族全体という集団の場合を対象として考察している」が×。筆者はまず「個体」から話をはじめている。また、「つぎに」以下の説明において、「人間」の場合、および「人間の自己意識」について触れられていない点でも×。

③は、冒頭に結論がある形で論が展開していると書かれているが、完全に間違っている。また、「最後に」以下の説明も、**問5**の正解の③に書かれているような、「『私』の自己意識は内部空間をもたない円の中心のようなものであり、むしろ他者との境界そのものにほかならないという考え」についてまったく触れていない。

④は、前半、中盤、最後の説明ともに本文の流れを正確に押さえており、問題ない。

⑤は、④と同じスタートだが、本文では「境界」に関する「問題の提示」はなされていないので×。また、「つぎに」以下の説明として「問題を一般化するために自己意識の存在に着目する」とある点もおかしい。④に書かれているように、「他の生物に比して人間の場合」の自己意識について考察することで、より複雑化した個と集団の問題について論を進めている。

正解　10　④　（8点）

第2問　小説　井伏鱒二「たま虫を見る」

［概　要］

井伏鱒二は共通一次時代の一九八九年に一度出題されたことがあるが、センター試験になってからは初の出題となる。短編小説「たま虫を見る」の全文が出された。

昨年より文章量がやや減り、内容的にも読みやすいものであった。しかし、主人公「私」のいろいろな時代の境遇を「たま虫」に投影する形で書かれており、その状況下での主人公の心情をうまく汲み取れるかどうかが勝負の分かれ目になった。昨年出された**問5**の「傍線のない問題」は出題されず、すべての問いが例年通りの設問形式・内容であった。

問1の語句問題は、下手に文脈判断すると間違えてしまうものが出題されたのも例年通り。正確な語句の知識が問われている。**問3**と**問5**の選択肢が三行ずつと長いが、全体的に見てセンター小説の平均的な設問が並んでおり、難易度も昨年並みといえる。

問1　語句問題。(ア)　**基本**　(イ)　**標準**　(ウ)　**基本**

> 傍線部(ア)～(ウ)の本文中における意味として最も適当なものをそれぞれ選べ。

語句は三つとも慣用表現で、「本文中における意味」を問う問題ではあるが、あくまで「辞書的な意味を優先して解く」というのは例年通りの鉄則パターン。今年の問題に限らず、こうした慣用表現には日ごろからいろいろな媒体を通して慣れ親しんでおき、語彙力を増強してほしい。下手に文脈に戻して判断すると間違える可能性がでる問題が出題されている。

(ア)の「浅慮を全く嘲笑した」は、①「短絡的な考えに対して心の底から見下した」が正解。「浅慮」を「浅い思慮」と砕いて考えるとわかりやすい。「嘲笑（ちょうしょう）」は、「馬鹿にして笑うこと」だが、ここでは声に出してあざ笑っているのではなく、心の中で見下していること。

(イ)の「通俗的」は、④「平凡でありきたりなさま」が正解。これはできれば辞書に載っている意味を知っていてほしい問題。下手に文脈で判断すると、直後の「感傷的」という言葉に引っ張られて⑤を選んでしまう可能性があるので注意しよう。

(ウ)の「さしでがましさ」は、③「人の事情に踏み込んで無遠慮に意見したがること」が正解。これは今でも「さしでがましい態度」などとよく使う言葉なので、聞いたことがあるはず。文脈判断的にも正解できるはずだ。

正解　(ア)　11　①　(イ)　12　④　(ウ)　13　③　（各3点）

問2　基本

傍線部A「私はもとの悲しさに返って、泣くことをつづけたのである。」とあるが、その時の心情の説明として最も適当なものを選べ。

心情問題だけに、小説の場面や状況、人物関係などをしっかり把握してから解答するようにしたい。前書きがある場合はそれが重要なヒントになることが多いので、前書きに書かれている場面や状況、人物関係などを整理して自分の頭の中に小説世界を想像し終わってから本文に入るようにするのがコツだ。

●心情が問われる問題でも、まずは客観的な要素（状況や場面設定・人物関係・人物や風景描写など）を本文で押さえ、それらが矛盾している要素を含む選択肢を消去する。

今回の問題も主観的な読解は危険だ。あくまで傍線部に書かれている内容と、その前後の状況を客観的に把握することを心がけてほしい。

まず傍線部に書かれている「もとの悲しさ」とはいつのことなのかを探すと、傍線部のひとつ手前の段落に「この悲しい時」とあるのが見つかるはずだ。それは兄に頬を殴られて木立の中に駆け込んで大声で泣いていた時の悲しさである。その内容を的確に書いてある選択肢は①しかない。

その①の選択肢の後半に、「誰とも打ち解けられずひとりでやり過ごすしかない寂しさをかみしめている」とあるが、それは傍線部の直前の内容の「誰にこの美しい虫を見せてよいかわからなかった」とあるところに対応している。

つまり、美しい虫を兄にも見せたいと思っても、実際に兄に見せればたちまち叔母に知れてしまい、結局自分が叱られるはめに陥ってしまう。だからといって「誰にこの美しい虫を見せてよいかわからなかった」と困惑するしかない私は「誰とも打ち解けられずひとりでやり過ごすしかない寂しさをかみしめて」泣くしかない状況だといえる。

他の選択肢は前述したように「もとの悲しさ」の説明が間違っているが、②は「兄や叔母にいつ見つかるかわからないという恐怖」が×、③は最後の「憤り」が本文からは読み取れないので×、④は前半の「怒り」と「叔母への告げ口しか思いつかない無力感」が読み間違いで×、⑤は「兄の過ちを正面から諭さなかったことを後悔」「自分の行動の意図が……理解されないだろうという失望感」のいずれもが本文に書かれていない内容・心情で×。

消去法で解いても正解は①になる問題だが、ここは「もとの悲しさ」の状況・心情を客観的に本文から探し出して正解してほしい。

正解　14　①　（7点）

問3　基本

傍線部B「私達はお互に深い吐息をついたり、相手をとがめるような瞳をむけあったりしたのである。」に至るまでの二人のやりとりの説明として最も適当なものを選べ。

まず設問で「傍線部に至るまでの二人のやりとりの説明」が問われていることを確認しよう。二人のやりとりとしては、次に会う約束の日時を決めた会話のあと、「私は決心して彼女の肩の上に手を置いた」で始まる段落から傍線部に至るまでの展開を正確に押さえていくことがポイントだ。

彼女への恋心を伝えようとして「私は決心して彼女の肩の上に手を置いた」とき、「たま虫」が私のレインコートの胸にとまっていたのを見つけた彼女が、すばやく指先でたま虫をはじき落してしまう。そこから、二人のすれ違いが生じている。

彼女がたま虫をはじき落したので、私は周章(あわ)てて「たま虫ですよ！」と叫ぶ。しかし、たま虫はすでに死んでおり、私が拾いとろうとするよりも早く彼女が草履でふみにじってしまう。

こうした描写でわかることは、「たま虫」に対する二人の思いの違いだ。私はかつてのことがあるので、たま虫への思いが深い。それに対して、彼女には単なる虫でしかない。しかも、彼女にとっては恋人である彼との間を邪魔する存在だ。

その思いの違いから、彼はたま虫を無慈悲に殺してしまった彼女を責める言葉を発するが、一方の彼女としては、大切な彼の胸についていた虫を退治してあげたのは愛情表現からであったのに、それを理解してもらえなかったため悲しい気持ちがこみ上げてくる。

そうした二人の交錯した心情が、傍線部B「私達はお互に深い吐息をついたり、相手をとがめるような瞳をむけあったりしたのである。」に表現されている。

選択肢が3行もあるので読むだけでも苦労するが、以上のポイントを一つ一つ正確に押さえていくと、⑤が正解であることがわかる。

①は、前半はいいとして、「恋人の優しさに疑いを抱いて発言している」が△。ここでの私のあわてぶりと発言内容を「恋人の優しさ」に対する疑問と解釈するのは少し無理がある。決定打は最後の「互いに不信感を持ち、うらめしい」。互いに好意を持っていた二人が、このやりとりだけでいきなりお互いに「不信感」「うらめしい」という気持ちにまでは至っていないので×。

②は、私のたま虫に対する説明として「とまどい、過去の経験にとらわれている」というのは本文から読み取れないので×。前のエピソードを勝手に解釈してこの選択肢を選ばないようにしたい。

③は、彼女が「たま虫を口実にして」肩に置いた手を振り払ったという説明だが、それは本文からは読み取れない。あくまで彼女は虫が恋人の胸についていたから反射的にはじき飛ばしてしまっただけである。

④は、「幸福のシンボル……気持ちを高ぶらせ」は言いすぎだし、「それを恋人に伝えようとしている」わけではないので×。また、恋人の説明としても「たま虫に気をとられたことに傷ついて」いるのではなく、自分の相手を思う真意が伝わらないことへの落胆と解釈すべきなので×。

正解　15　⑤　（8点）

問4　標準

傍線部C「硝子にうつる私の顔は、泣き顔に見えた。」とあるが、なぜそう見えたのか。その理由として最も適当なものを選べ。

理由説明問題の場合、結果にいたる原因の箇所を正確にとらえるのが大前提になる。因果関係には大きく言って次の二つのパターンがある。

●因果関係

1　原因→結果　　いわゆる順接の関係で、評論では「したがって」「だから」などの接続語で結ばれる場合が多い。

2　結果→理由説明　先に結果を述べておき、後で「なぜなら～だから」という形で説明するもの。

今回の傍線部Cは場面転換の直前にあるところから、原因は手前に書かれていることがわかるのでそれを丁寧に拾っていくことになる。たま虫を見つけた私はそれを摑まえようとするのだが、警察から注意人物とみなされている私は、警察がカメラでその姿を写して、絵葉書を盗もうとしていると勘違いする可能性を想像して動けない。そこで、ただ長い時間たま虫を眺めながら顔をしかめていたが、硝子にうつるその顔が泣き顔に見えた、という流れだ。

ポイントとしては、

1　いろいろな理由から、私は注意人物として警察ににらまれていた。

2　エハガキ屋の飾り看板を顔をしかめながら眺めていた姿を警察に写されて、疑われたことがある。

3　思いがけずたま虫を見つけたので摑まえたかったが、警察がカメラでその姿を写して絵葉書を盗もうとしていると勘違いする可能性を想像して動けない。

4　私は長い間たま虫を眺めながら顔をしかめていたが、硝子にうつるその顔は泣き顔に見えた。

以上の流れを適切に説明している選択肢は①で、これが正解。「自分に情けなさを感じている」という心情説明も問題ない。ただし、こうした問題の場合は、心情説明に関してはある程度の幅を持たせて許容しておき、それよりも客観的な状況や事実の説明が正しいかどうかのほうに力点をおいて選択肢を吟味してほしい。

②は、「たま虫を摑まえたいという長年の希望をかなえられない」が本文に根拠がないうえに、それがかなえられないから「悔しさ」を感じているという解釈はズレているので×。

③は、「たま虫を摑まえようとしていたために警察に誤解されたのだと気がついた」わけではないので×。また、警察に対して「誤解は解けない」うんぬんの理由で泣き顔に見えたわけでもない。②や③を選んだ人は、主観的で勝手な解釈をしないように注意しよう。

④は、「自分が写真に撮られた理由を確認するという目的があって来た」わけではないので×。また、「警察に疑われている立場を忘れて」いるわけでもないので×。

⑤は前半はOKだが、後半の「その美しさを感じる余裕を持てない自分に寂しさを感じている」わけではない。たま虫を摑まえたかったが、警察がカメラでその姿を写して何か悪いことをしていると勘違いする可能性を想像して動けないことに情けなさを感じているのである。

正解　16　①　（8点）

問5　基本

傍線部D「私は人を押しのけはしないのだと心のなかで思いながら、実は少しばかり人を押しのけながら割り込む必要を覚えた。」とあるが、この時の私の考えはどのようなものか。その説明として最も適当なものを選べ。

傍線部Dがある場面の最後にあるので、その場面の状況や心情を拾っていくことで正解できる。

今回の井伏鱒二の小説は、「たま虫」をキーワードにしながら、主人公の「私」の少年時代から大人になる過程において起こったいくつかの出来事の印象的な場面をつづっている。

この傍線部Dは、70行目から92行目までの1ページちょっと書かれた場面の最後にあるので、70行目から話の流れをおっていこう。

1　就職口が見つかったことを叔母に報告したところ、祝いの手紙が来て慰められた。

2　その勤め先において生意気だという理由で頭を殴られたが、それに対して反抗しなかった私は、自分のことを弱い男だと思い、つまらなく不愉快

になる。

3　その後、髪を切った帰りに電信柱の根元に死んだたま虫がいるのを見つけ、電信柱にとまらせてみるがとまらないので、針で刺して標本のようにたま虫を電信柱にとめる。

4　そのたま虫を袖の中にしまった私は、電車で帰ろうとするのだが、後から来る人々は私を押しのけては電車に乗っていってしまう。

5　傍線部D「私は人を押しのけはしないのだと心のなかで思いながら、実は少しばかり人を押しのけながら割り込む必要を覚えた。」

この流れの中で、傍線部Dへとつながる「私」の心情や考えは2番目以降の内容。勤め先で殴られても反抗せず、自分を弱い男だと思って不愉快になっていた時、死んでいるたま虫を見つけて持ち帰る。その帰り道で、電車に乗ろうとしては人々に押しのけられて電車に乗れない私が考えた内容が傍線部Dである。

人を押しのけること（＝強い自己主張）はしないまでも、生きていくためには少しばかり自分を守っていく必要性がある、ということに私は気づきはじめている。

そうした流れを適切に説明している選択肢は③。

①は、「幸福」を比較する内容になっているが、この場面では幸福についての私の考えは述べられていないので×。

②は、「出世」や「有利な状況」「周囲とのより良い関係」について書かれているが、本文からはそうした内容は読み取れないので、×。

④は、前半部分も本文に書かれていない内容だが、後半の「他人の言葉の裏には自分を支配したい欲求もある」の箇所は完全に×。

⑤は、なんとなく方向性は合っているようにも読めるが、「あらかじめ自分の限界を決めて新しいことには踏みきるまい」や、「人々と共に生きるためには相手の気持ちに配慮しつつ、自分の望む形を通すことも大切である」という表現は本文には書かれていない。

●本文に書かれていない、あるいは対応する表現がない場合は×になるのが鉄則。

というセンター現代文の鉄則を確認しておこう。

正解　17　③　（8点）

問6　基本・応用

この文章における表現の特徴の説明として適当なものを二つ選べ。

新課程になってから、小説の最後の問題はこうした「表現の特徴」や「叙述の説明」について問うものが連続して出題されている。昨年同様、今年も正解を「二つ」選ぶ形式になっている。

解法としては、選択肢を要素に分けて○×を付け、基本的に消去法で解くのが確実。また、選択肢同士を比較して解くという視点も有効だ。一つずつ選択肢を見ていこう。

①にあるように、「まず語り手が出来事の概略を述べ」「次に登場人物の私に寄り添ってその視点から……主観的に語る」という手法でこの小説が書かれているわけではないので×。あくまで「私」の目から見た出来事の記述であり、心情吐露である。この形式は「私小説」といわれるもので、視点移動は行われていない。

②は、文章の構成についての説明だが、特に問題ないので○を付けて通過。

③は、「標本みたい」というのが「比喩表現」であるかどうかの知識が問われている。普通、比喩という場合は「直喩」を指す場合が多く、その場合は「～ようだ」「～ごとし」が用いられるが、「～みたい（だ）」も比喩表現だ。この「～みたい（だ）」は、「～ようだ」の口語的表現で、ここでも「標本みたいに」を「標本のように」と置き換えることができる。そして、その比喩表現の効果として、「たま虫に自分自身の境遇を投影する私の心境が効果的に描き出されている」という説明は間違いではないので、○を付けて通過。

④は、「より生き生きとして見えるたま虫」と「死んだように生きていると感じている私」とが対比関係にあると述べられているが、それは間違っているので×。ここで、筆者が死んでいるたま虫を「生きているように」と繰り返し書く意味は、その姿が私自身の投影になっているからである。つまり、死んでいるたま虫を見て、まるで生きているようだと言って自分を無理やり納得させている私は、実は死んでいるたま虫同様、実は（社会的に）死んでいる存在であるということを暗示している。このあたり、正確な読解力が必要とされる。

⑤は、「水をのむ」ことが「たま虫が粉末になったこと」と対比されているとあるが、この時の私が「みずみずしさを保っている」わけではないので×。たま虫が私の袖のなかで粉々になっているのを発見した私は、その粉末を窓の外に吹き飛ばすのだが、たま虫は私の悲しいときに現れるのであり、「私の不幸の濃度」を計ってくれるものだと書かれている点に着目したい。最後の段落で「若し失職したならば叔母に依頼して、牧師になるように手続きしてもらおうと思っていたのである」と書かれている点からも、「みずみずしさを保っている私の生」とは解釈できない。

⑥は、「幸福についての私の考え方の変化」とあるが、96行目以降の描写でその変化を表現しているとは言えない。④・⑤でも説明したが、私は

社会的には死んだような生き方をしており、それは大きくは変化していない。人生のいろいろな場面で見るたま虫の存在は、自分の「不幸の濃度」を計ってくれるものだと考えているのだから、96行目以降で「幸福」についての考え方が特に変化したとは読めないので×。

以上から、②と③が正解となる。

●「叙述の説明」や「表現の特徴」で二つの正解を選ぶ場合、一つはすぐに正解とわかる場合が多く、もう一つの正解はすべての選択肢を消去法で確認した後、残ったものを選ぶという手順を取る。

ここでは、②はすぐに正解として選べるはずだが、③を選ぶには他の選択肢を消去法で×にしてからでないと難しい。特に、④や⑥を×にするには、相当な小説読解力と選択肢の正確な吟味が必要だ。

正解　18・19　②・③（順不同）　（各5点）